

# 地域 の みかた

— 京都の身近な風景からひもとく地域らしさ —

京都市文化市民局

## はじめに

「風景」と聞くと、1枚の写真のように切り取られたシーンを思い浮かべるかもしれません。しかし、その背景には人の営みや自然との関わり、歴史、文化など“生きている地域の姿”が地続きに広がっています。私たちが地域の価値を見出し、その土地らしさを伝えようとするとき、目には見えないもの・ことを含めた、“切り取らない風景のとらえ方”が必要になるのではないのでしょうか。

文化的景観は、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」(文化財保護法第二条第1項第五号より)を対象とするもので、言いかえると、自然基盤と人々の営みの関わり合いからつくり出される風景そのものを文化財としてとらえるものです。文化財というと、景観の優れた地域だけが対象のように思われるかもしれません。しかし、どのような地域でも文化的景観という地域の見方でとらえ直すことで、その土地ならではの価値〈地域らしさ〉が見つかります。また、京都市景観計画では、京都の景観はそのすべてが文化的景観であるとしています。

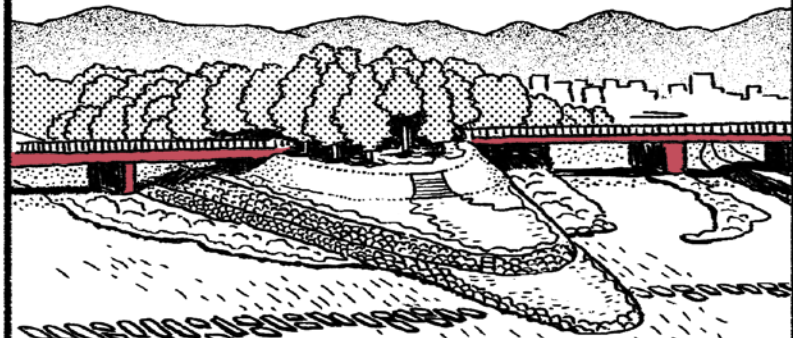
本書では、京都の文化的景観を、①自然とのつながり、②営みとのつながり、③過去とのつながり、④人とのつながり、という4つの観点でひもといていきます。農山村よりも中心地域や景勝地、さらには歴史的な側面に限った〈地域らしさ〉が語られることの多い京都も、文化的景観の視点から見つめることで、特徴のない地域はひとつもないのだと気づかされるでしょう。本書が、京都市内の様々な地域で〈地域らしさ〉を探り、語り、将来につないでいく取り組みに生かされることを願っています。

# 地球のカタチ

## ・京都編・

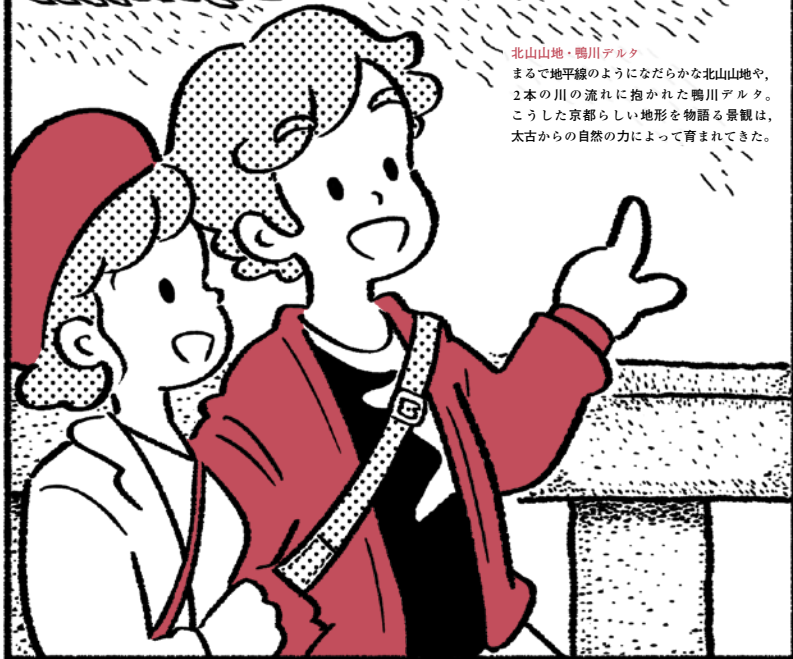
漫画・ホリグチ イツ

京都でのんびりと過ごす、とある休日。  
鴨川デルタや出町柳の商店街を散策し、  
和菓子に、抹茶に舌鼓。気づけば、「ああ、  
京都らしいわ〜」なんて言葉を口に  
しているけれど、いったい何がそう感じ  
させるんだろう？



### 北山山地・鴨川デルタ

まるで地平線のように広大な北山山地や、  
2本の川の流れに抱かれた鴨川デルタ。  
こうした京都らしい地形を物語る景観は、  
太古からの自然の力によって育まれてきた。



### 鯖街道

京都には中心市街地と周縁地域をつなぐ、  
たくさんの街道がある。出町柳を起点とする  
若狭街道は通称「鯖街道」と呼ばれ、遠く  
福井県へと続いている。



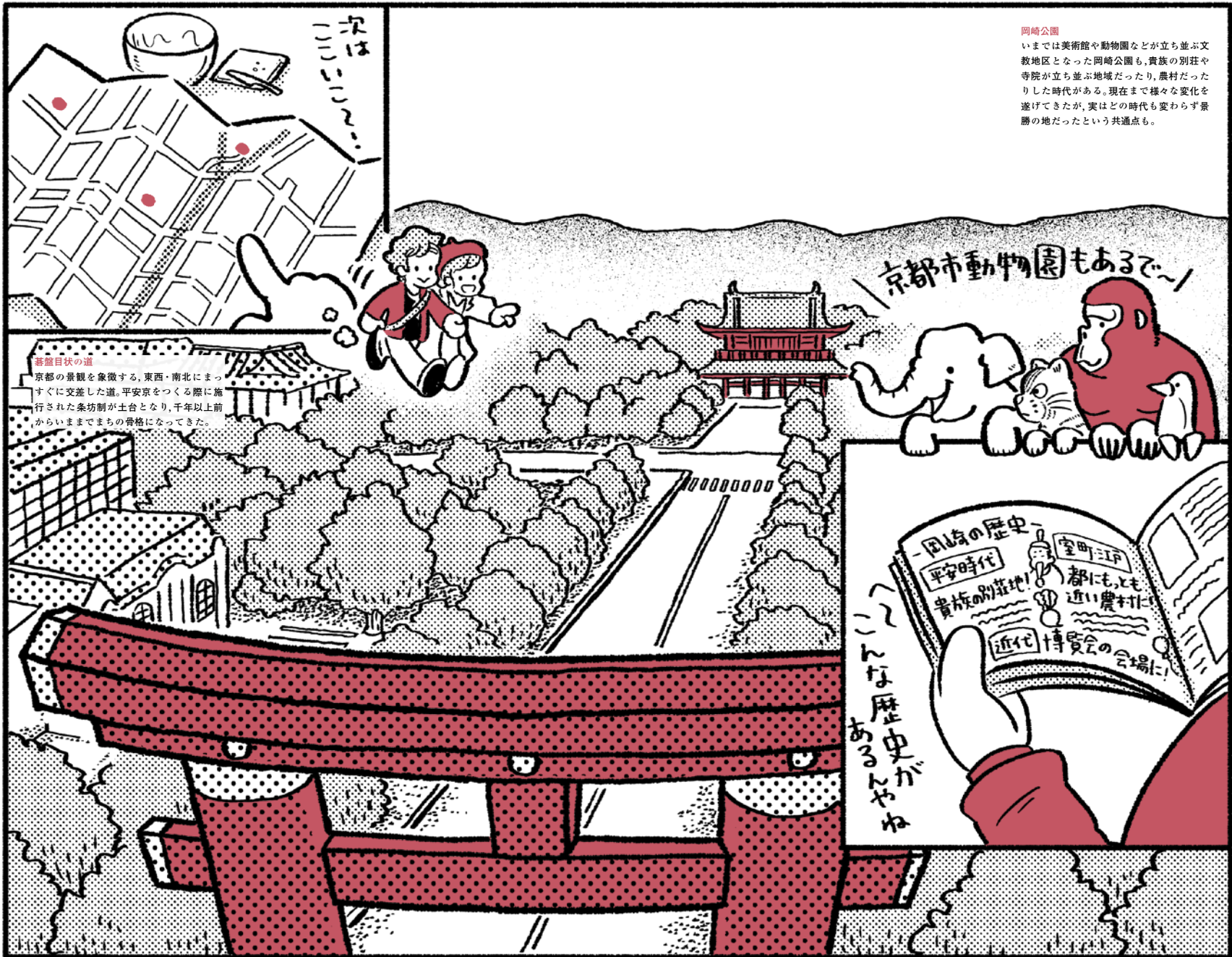
### 宇治茶

観光名所として知られる宇治は、京都の文  
化を支えてきた農産地のひとつでもある。  
「宇治茶」はその代表例と言える。

### 北山杉

古くから街道は、周縁地域で生産されたも  
のを中心市街地に運びこむ役割も果たして  
きた。たとえば北山特産の「北山杉」は建物  
の建材や庭木に。



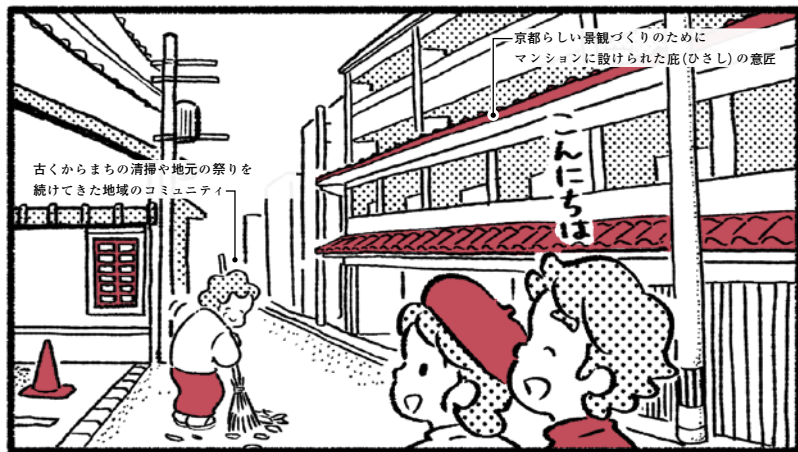


阿岐公園  
いまでは美術館や動物園などが立ち並ぶ文教地区となった阿岐公園も、貴族の別荘や寺院が立ち並ぶ地域だったり、農村だったりした時代がある。現在まで様々な変化を遂げてきたが、実はどの時代も変わらず景勝の地だったという共通点も。

京都の景観を象徴する、東西・南北にまっすぐに交差した道。平安京をつくる際に施行された条坊制が土台となり、千年以上前からいまでもまちの骨格になってきた。

京都市動物園もあるで〜!

阿岐の歴史  
平安時代  
室町江戸  
都にも、とちも 近い農村に  
近代 博覧会の会場に!  
こんな歴史があるからね



お地藏さん  
 京都のあちこちにあるお地藏さんは、化粧や衣類をまとい、地域コミュニティで大切にされてきた。なかには、タイルをあしらった凝った祠(ほころ)も。京都の景観は、自治の伝統の中で守り伝えられてきた。

いつも目にする何気ない景色の中に、  
 まだまだたくさんの〈京都らしさ〉が  
 隠れています。

## 地域のみかた

—京都の身近な風景からひもとく地域らしさ—

「自然」とのつながりから見る	8
京都の原風景	10
自然基盤を活かした都市の工夫	12
山地と盆地のはざま	14
エコトープとしての京都	16
「営み」とのつながりから見る	18
いくつもの都市からなる京都	20
中心と周縁との関わり	22
道によるつながり	24
ヒンターランドでの営み	26
「過去」とのつながりから見る	30
歴史の積み重ね	32
営みの変化と持続	34
都のイメージ	36
「人」とのつながりから見る	40
自治の風土がつくるもの	42
景観を守るしくみ	44
折り合いのマネジメント	46
京都の文化的景観リスト	48
付録：京都らしさの理解につながる10の資料	54
付録：参考文献リスト	56
おわりに —この本ができるまで—	58
『京都の文化的景観調査報告書』の紹介	59

# 「自然」

## とのつながりから見る

古くから人々は、山や谷、川の流れ方、土の状態といった自然条件と向き合いながら、安全や快適さを求めて土地ごとの暮らし方をつくってきました。農山漁村に限らず、都市域でも、自然を読むことで街区をつくり、産業のあり方や暮らしのルールが見出されてきたのです。そうした自然基盤と人の営みの結びつきから京都の文化的景観の特性を探っていくことは、京都の多様性を知ることにつながっています。

#京都の原風景 #山頂の高さがそろう北山山地 #太古の京都盆地  
#平安京遷都 #山川の美 #扇状地と氾濫原 #桂川の洪水 #東へ移動する中心市街地 #山と盆地の境界線 #活断層 #五山の送り火 #山の信仰 #丘陵と段丘 #自然堤防 #観光エリア #京野菜 #エコトープ #京都の多様性

## 京都の原風景

それぞれの地域には、原点ともいうべき風景、人の暮らしが成立する前の土地の姿があります。その根源的な土地の成り立ちを知ることから、文化的景観の読み解きが始まります。

どんな地域であろうとも、土地の自然をないがしろにしては暮らしていけません。自然がもたらす恩恵や脅威と向き合い、自然をうまく活かすことで生活や生業が成り立ちます。地形や地質、水系、気候といった自然基盤が、人の暮らしのあり方を決めてきた部分が大きいのです。それは、京都も同じです。一般に、歴史的経緯から語られることが多い京都の景観も、実は、自然基盤と深く結びついています。

日本列島の歴史を振り返ると、その土台の大部分は、海のプレートが陸のプレートに沈み込むときに、海底の堆積物がはぎ取られて張り付いた「付加体」から成り立っています。およそ3億年をかけて、アジア大陸のふちにつくられていった付加体が、原初の日本列島になりました。山地と盆地からなる京都の基盤もこの付加体からできています。

京都市北部に広がる北山山地は、兵庫県、大阪府、滋賀県、福井県にまたがる丹波高地の一部に含まれる山々の連なりです。およそ2～1億年前の中生代に生まれた付加体で、隆起や浸食が繰り返されながら、標高800～900mほどのほぼ同じ高さの山地が形成されていきました。生物・人類学者の今西錦司は、山頂がほぼ同じ高さにそろった北山山地を「山頂によってつくられたる地平線」と表現しています。

一方、北山山地の南部に広がる京都盆地は、活断層の活動により地面が陥没することで生まれました。そして400～350万年前に奈良盆地も含む一帯は水をたたえた広大な湖になります。やがて湖の

水は大阪湾へと抜けていき、90～60万年前になると、今度は大阪湾から海水が入ってきました。このころ、吉田山(標高121m)や船岡山(標高112m)、双ヶ岡(標高116m)といった盆地の中の丘は、海上に浮かぶ島だったと考えられています。

再びその水が引き、川が生まれ、北部の山裾には段丘や扇状地、南部の低地には自然堤防や後背湿地からなる氾濫原がつくられました。こうして人が暮らすことのできる土地が自然の力でゆっくりと形成されていきます。旧石器時代には高台に人が住みはじめ、縄文から奈良時代まで徐々に居住者が増えていきます。そして、いまからおよそ1200年前の延暦13年(794)、京都盆地に都が遷され、平安京が生まれました。

## 自然基盤を活かした都市の工夫

平安京遷都の詔には、「<sup>みことのり</sup>葛野の大宮の地は、山川もうるわしく、四方の国の百姓の<sup>かどの</sup>参出来ることも便にして」とあります。ここからは、自然の景勝の地であり、交通の便がよいという理由によって、京都の地が首都に選ばれたとわかります。さらに、延暦14年(795)の踏歌「山河、美をほしいままにして四周に連なる」からも、当時の都を選ぶための思想に、山川の美しさが含まれていたことが推察できます。この「山川の美」という考え方は、近・現代の「山紫水明」の原点ともいえるでしょう。しかし、そうした自然がつくり出す地形は、当時の都市の理念と一致することもあれば、そうではないこともありました。

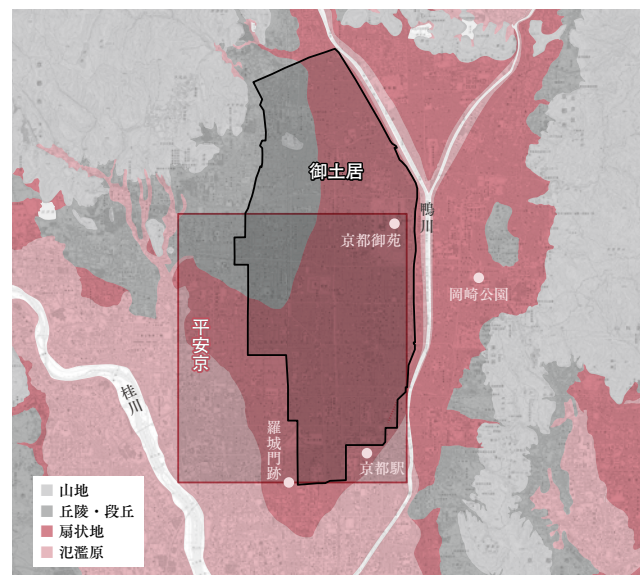
平安京の大部分は土地の安定した鴨川扇状地の上につくられました。基盤目状の街区の南の端は、その扇状地の末端にあたります。ここを境にして、都の正面玄関である羅城門と東寺・西寺が置かれました。また、安土桃山時代に豊臣秀吉が築いた<sup>まいでく</sup>御土居の南端も、明治10年(1877)にできた京都駅も、ちょうどこの扇状地の末端部分にあたります。つまり、近代までの京都の歴史的市街地のほとんどは、鴨川扇状地の上に計画されていたと言えるのです。

ところが、平安京の南西部分の街区が計画された場所は、扇状地ではなく桂川の氾濫原とその周囲の水はけの良くない土地でした。曲線からなる自然の地形の上に、理念を優先した四角いかたちの都市をつくらなければならなかったからです。

氾濫原とは、洪水などによって河川が氾濫し、運ばれてきた土・砂・小石などが堆積して生まれたほぼ平らな土地のことです。したがって、平安京の西側は桂川の洪水などによって9世紀後半には徐々に衰退をはじめました。結果、都市域は平安京の東側、安定し

た扇状地の上に集中するようになり、現在の中心市街地へとつながっています。

都市をどこにつくるのか。その立地の決め手となるのが、水の得やすさ、自然災害を受けにくい地形、気候といった自然条件と、交通の便や資源の得やすさといった社会条件です。そして、その都市をよりよく住みこなしていく過程の中で、自然基盤が活かされていくのです。





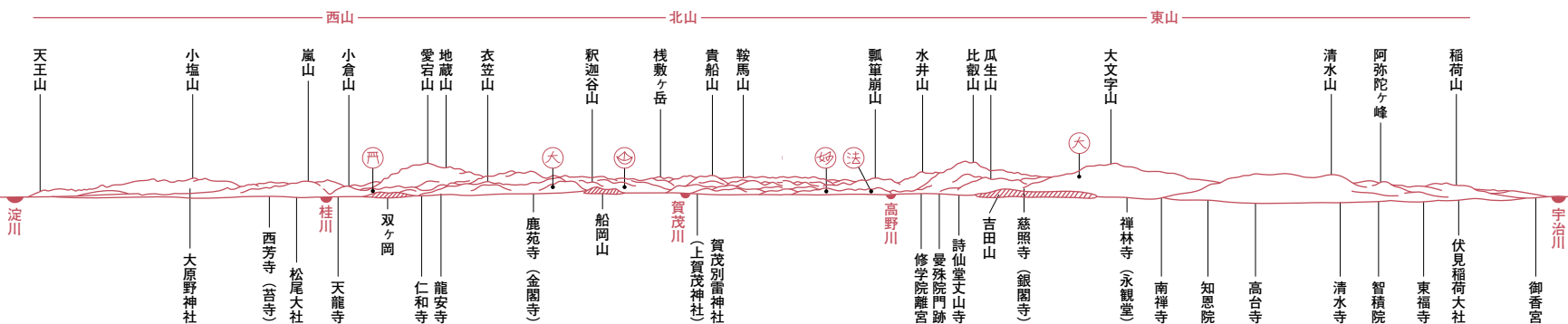
## 山地と盆地のはざま

京都の景観特性として自然条件を挙げるとき、多くは京都盆地とそれを取り囲む三方の山々という2つの要素から語られます。これは、ほかの大都市と大きく異なる点であり、京都らしさをもっとも際立たせる特色と言えるでしょう。

たとえば、京都では市中から望む三方の山々を、東側を「東山」、北側を「北山」、西側を「西山」と呼びます。こうした山並みの呼び名が生まれた背景には、市街地から山が近いこと、盆地と山地の境界がはっきりしていることが挙げられます。特に後者の特性には、京都盆地の東西を縁取る活断層が関係しています。東は花折断層帯、西は京都西山断層帯といい、これら断層の運動により壁のような山々に取り囲まれた陥没盆地が形成されました。こうして山々と市街地が断崖によりくっきりとすみ分けられることがなければ、市街地から山並みを望む文化、五山の送り火といった行事、麓の寺社の連なりも成り立たなかったのではないのでしょうか。

京都盆地から望む山々は、同時に、信仰の対象にもなってきました。中でも代表的なのが、北東の比叡山と北西の愛宕山です。比叡

山から大文字山に続く東山一帯は、いまから1万年ほど前に上昇したマグマが冷え固まって花こう岩帯となりました。このとき、もともとあった山の表面がマグマとふれることでホルンフェルスという硬い岩質になり、花こう岩が風雨により浸食されていく中で、ホルンフェルスの部分だけが孤高の姿として残っていきます。これが比叡山と大文字山の成り立ちです。一方、北西の愛宕山もまた、丹波高地が川に浸食されてなだらかな地形を形成していく過程で、浸食から取り残されることにより生まれました。その後、双方の象徴的な山は、神聖な地として崇められていきます。比叡山には天台宗延暦寺が建立され、山麓の大原や修学院にも天台宗の寺院が多数立地するようになりました。大文字山は五山の送り火の舞台であるほか、裾野には現在も銀閣寺などの寺社が林立しています。また、愛宕山には火の神がまつられ、麓に門前町がつけられました。このように、市街地から望む山々は信仰の対象となるとともに、山地と盆地のはざまには、山と山麓が一体となった信仰空間が形成されてきたのです。



## エコトープとしての京都

地理空間情報をインターネット上のオープンデータとして簡単に入手できる現代では、地質図や地形分類図、標高図、過去の空中写真などから、土地の成り立ちを知ることも容易になりました。こうした詳細な情報を手がかりにして京都の隅々を見てみると、「山地」と「盆地」という2つの区分だけでなく、山の高さ、川の流れ方、断層の向き、土壌の差異などの様々な違いが見て取れます。そして、多様な自然基盤の上に折り重なる人々の営みもまた地域によって異なることに気づかされます。

たとえば、京都盆地の内側は、山裾の丘陵と段丘、扇状地、氾濫原の大きく4つに区分することができます。山裾には多数の神社仏閣が立地し、現在も京都の観光エリアとして多くの来訪者を集めています。中でも東山は、平安京にもっとも近い郊外として丘陵一帯に名所の連なりが形成されました。続いて、扇状地は、近世までの都市域の大部分が立地してきた場所です。近郊農業が盛んな地域でもあり、聖護院だいこんや聖護院かぶ、すぐき菜、賀茂なすといった京都の食文化に欠かせない<sup>とさい</sup>野菜を生み出してきました。そして、洪水のときに河川からの浸水を受けとめてきたのが、氾濫原です。河川の流れに沿ってつくられた自然堤防の上に、近世以前からの集落や寺社が立地し、また、川の氾濫によって土砂が運ばれ、土地が肥沃で水も得やすいため、低地では稲作が盛んに行われてきました。

これらのように、都市域においても、農山漁村においても、地域らしさを見出すための糸口は、自然との折り合いのつけ方にあります。自然と人の営みの関係をひもといていくことは、地域を「エコトープ」として理解することにほかなりません。エコトープとは、地形や気象、

景観までも含む、あらゆる生き物が生息する空間全体を指す言葉です。この視点から京都をとらえていくと、特性のない地域はないということに行きつきます。自然基盤と人々の営みの結びつきから京都の各地域を見つめていくことは、京都の多様性を表現することにつながっているといえるのではないのでしょうか。



扇状地の柿畑



自然堤防上の集落

# 「営み」

## とのつながりから見る

「京都」と聞いて、どんな風景が思い浮かぶでしょうか。多くの方は、神社仏閣や歴史的な町並みなどのある京都盆地の都市部を最初に想像するかもしれません。しかし実際の京都は、そうした中心市街地の営みだけではなく、周縁地域=ヒンターランドとの関わり合いの中で成り立っています。複数の地域によってつくられる全体としての「京都」。その関係性を知ることが、都市の文化的景観を見出す一歩となります。

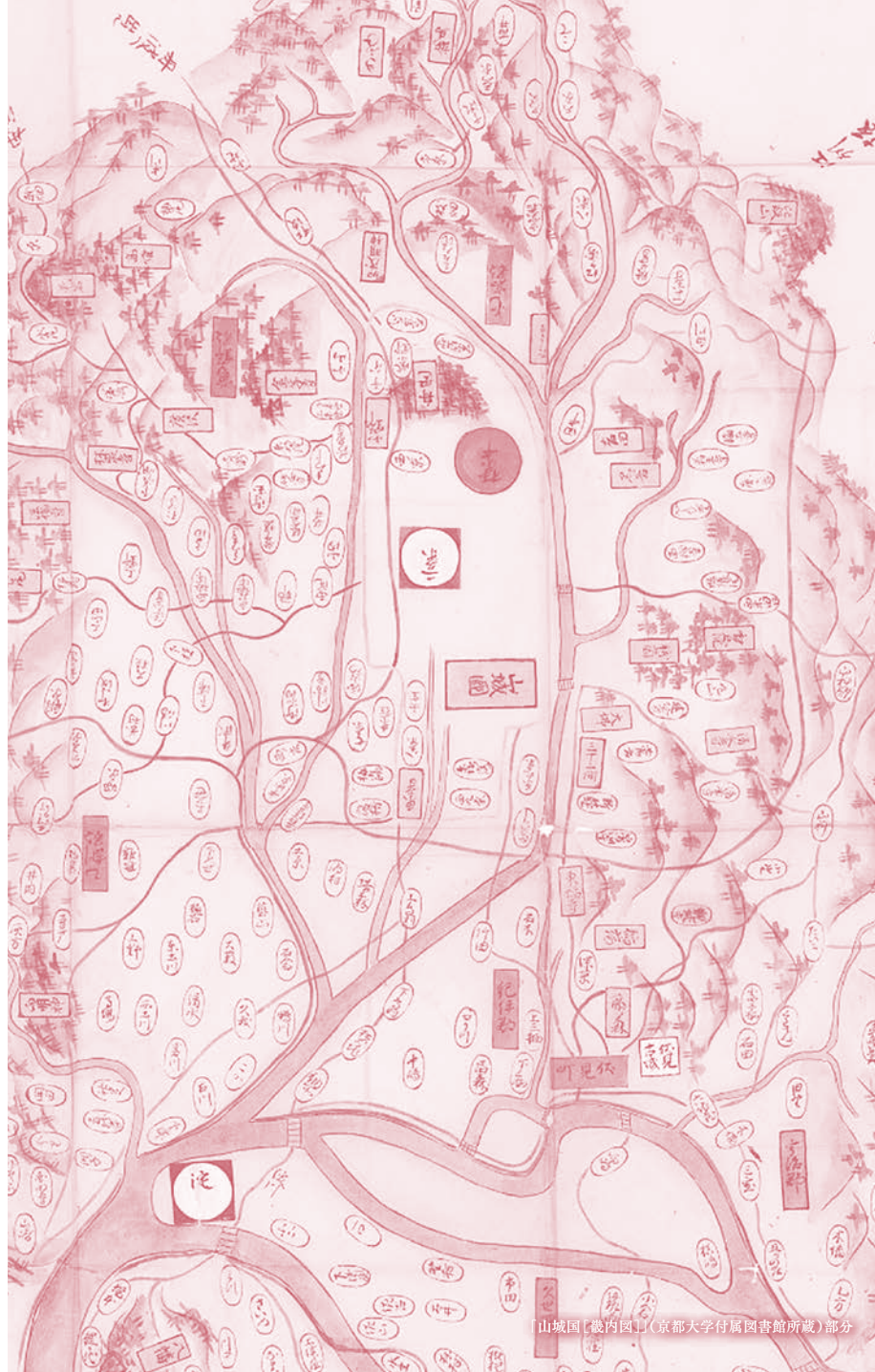
#平安時代から続く洛中と洛外の関わり #日本の都市の歴史は道づくりの歴史でもある #都市を構成する地域は、多種多様な歯車ともいえる #ヒンターランド #いくつもの都市が結びついて成り立つ都市 #中心市街地とその周縁 #生業

## いくつもの都市からなる京都

平安時代に首都を有した京都には、千年を超えて現在に至るまで変わらない中心市街地があります。それは主に政治・経済・文化の中心となったエリア（現在の上京区から中京区、下京区の一帯）で、歴史的には「洛中」と呼ばれてきました。洛中の北部は、平安時代から国家機関が立地する場所だったため、御所を中心に政治や行政といった機能を担う地域となりました。南部は、商業や手工業に関わる町衆が住むにぎやかな市街、また祇園祭の山鉾巡行を担う地域であり、日本経済の中心地としても発展していきました。

その外側に目を向けてみると、平安時代後半に平安京の副都心となった岡崎、寺社の門前町が連なる東山、貴族の邸宅や大寺院が営まれた嵯峨、城下町として骨格がつけられた伏見など、様々なエリア＝都市があります。それぞれの成り立ちの違いによって、現在の営みや景観は大きく異なり、そこに京都における地域の個性・独自性が多様に表れているのです。

京都は、洛中を核としながら、いくつもの都市が結びついて成り立つ複合的な都市です。都市の変遷を時代ごとにとらえるのみならず、それぞれの地域がどのように関係してきたかという視点で見ると、いま目の前に広がる景観の奥行きがさらに広がっていきます。



## 中心と周縁との関わり

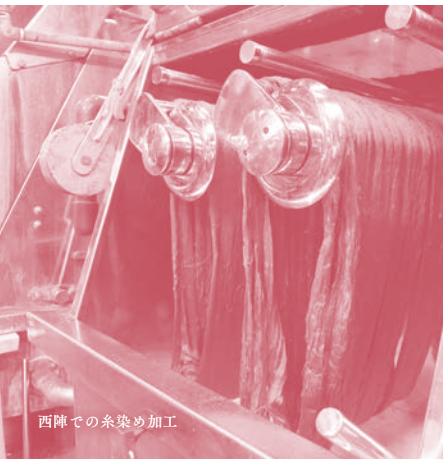
京都に限らず「都市」と呼ばれる地域は、その周りに広がる地域と関わり、支え合いながら都市機能のおよぶ圏域をつくってきました。そうした地域を、ドイツでは「ヒンターランド」と言い、イタリアでは「テリトリーオ」と呼びます。

イタリア建築・都市史を専門とする陣内秀信は、イタリアは「都市を中心にその周辺に広がるテリトリーオが一体となって、ひとつのまとまりのある社会経済的なポテンシャルと文化的アイデンティティをかたちづけてきた」と述べています。京都も、中心市街地と周縁地域との関わり合いの中で、都市の個性が磨かれてきました。京都の都市史が専門の高橋康夫は、「持続する中心市街地と周縁後背地（ヒンターランド）が京都の存続・成長を支えてきた」と言います。

ここでは、祇園に代表される花街の風景を例に考えてみたいと思います。舞妓や芸妓が着る着物には、市内の呉服商だけでなく、織元が集まる西陣や、染物屋が集まる堀川一帯といった、職人たちが集住するまち（同業者町）の存在が欠かせません。そして、お茶屋や

料亭で出される料理には、京都盆地周縁の農地で育てられた京野菜が使われ、建物の建材には、北山で生産された北山杉が用いられます。そういった風景の中に、花街の営みがヒンターランドの生産活動によって支えられている様子が見て取れます。

それぞれの地域は、中心地市街地との関わり合いの中で生活や生業のかたちを決めてきました。それは、都市という大きな機関を動かす歯車にもたとえられるでしょう。都市圏を担う様々な地域は、お互いの関わり合いの中で自身の歯車の大きさやかたち、スピードといった内容を調整してきました。そして、歯車が次々にかみ合いながら回転や動力を伝えるように、全体としての都市圏をつくってきたのです。その中で京都は、千年以上の歳月をかけ、日本のどの都市よりも安定した構造を築いてきたと言えるのではないのでしょうか。



西陣での糸染め加工



水尾でのゆずの生産



大枝の京野菜



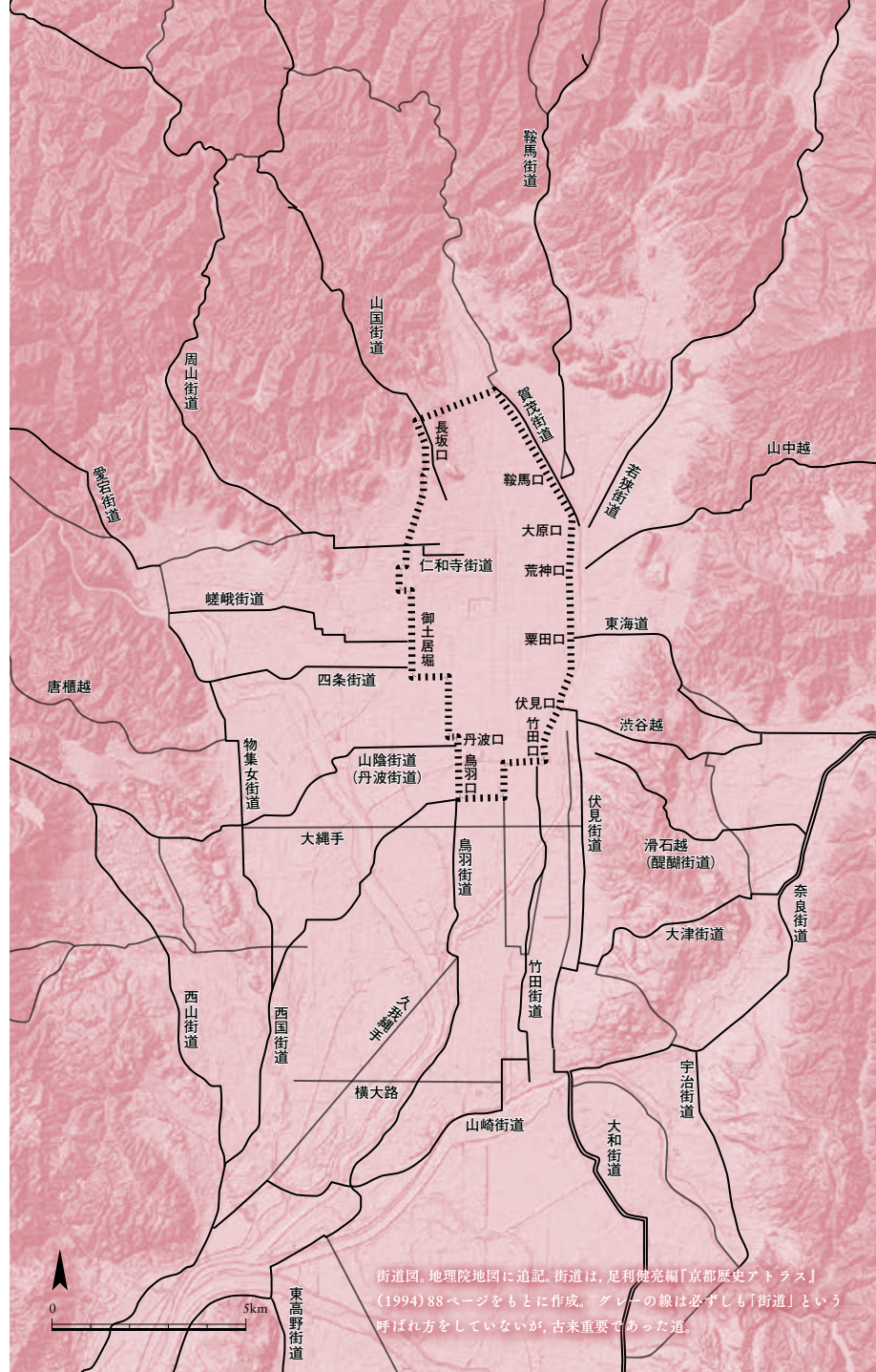
中川の北山丸太

## 道によるつながり

日本をはじめとする東アジアの首都の多くは、古代中国の条坊制という都市プランをモデルにつくられました。しかし、日本では、平城京でも平安京でも、中国の都市には必ずある城壁をつくることはしませんでした。むしろ、中心市街地から周囲の地域へとつながる道を積極的に通したのです。周囲の地域から隔離されることなく開かれ、連続し、関わり合うという日本の都市の特徴は、その道に起因しています。

平安京を例に見てみましょう。規則正しく敷かれた碁盤目状の道路網は、やがて平安京のあった区画(右図、破線のエリア)を超えて近郊まで伸びていきました。城壁をもたず、道を介して周辺の地域とつながる中で、中心市街地と周縁の関係が生まれ、全体としての「京都」となっていたのです。

次に、市街地から北へと延びる「鞍馬街道」を見てみます。鞍馬は、鞍馬寺の門前町として有名ですが、京の七口のひとつである鞍馬口と若狭を結ぶ鞍馬街道の結節点として、北山で生産される炭や山菜といった山の恵みが集まる「陸の港」でもありました。特に、鞍馬の炭は「鞍馬炭」と呼ばれ、中世の時代からブランド化され、市中の暮らしを支えてきました。その炭は鞍馬から街道に沿って北上した花脊や広河原、久多といった山間地域から運ばれ、鞍馬で炭を下ろした人々は、そこで日用品などを買い、また同じ道を帰っていったのです。



街道図、地理院地図に追記。街道は、尼利健亮編「京都歴史アトラス」(1994) 88ページをもとに作成。グレーの線は必ずしも「街道」という呼ばれ方をしていないが、古来重要であった道。

## ヒンターランドでの営み

中心市街地の営みがつくり上げた景観と、都市の周縁＝ヒンターランドの営みがつくり上げた景観は、不可分の関係にあります。

ヒンターランドは、中心部の政治や経済、社会、文化などの強い影響下にありますが、決して一方的に都市の機能を支えるだけの存在ではありません。中心部とその郊外がお互いに支え合う中で、周辺の地域にも独自の生活や生業の姿がかたちづくられていったのです。たとえば、洛中と山地との境界(エッジ)にある地域は、信仰や景勝、加工といった機能を担ってきたことがわかります。ヒンターランドの中でも、洛中との近さや地形条件などから役割分担をしていたのです。ここでは、その中の3つの機能＝生業を紹介します。

### 観光業

京都では、平安時代から盆地の周囲を取り囲む三山のふもとの景色が愛でられ、貴族の別荘地となったり、寺院がつくられたりしてきました。東山、嵯峨、伏見、宇治などがその代表例です。こうした洛外の景勝地は、江戸時代になると多くの人々が観光で訪れるようになり「名所」となっていました。

景勝地に人々が求めたのは、寺社や旧跡に触れることだけではありません。行楽地として季節を楽しむことも目的でした。春になると嵐山や御室へお花見に、夏になると貴船や高雄の緑豊かな川床へアユを食べに、秋になると東福寺や高雄へ紅葉狩りに行きました。

京都の人々は、京都全体を庭に見立てるようにして、古くから季節ごとの暮らしを楽しんできたのです。

### 農業

ヒンターランドは、農林水産業の場でもあります。都市近郊での農業は、購買力の高い都市の生活と密接に結びつき、野菜や草花、果実などの小規模で集約的な生産が行われることが多いとされています。その中でも京都のヒンターランドでは、単に鮮度の高いものを生産するというだけではなく、都の食文化に応えるため、労働力や技術、資本、肥料などを多く注ぎ、高品質のものをきめ細やかにつくってきました。京たけのこや宇治茶はその代表例ですし、そのほかにも大原の赤しそや水尾のゆずなどが挙げられます。

### 林業

北山の山間にある中川地区では、節が無く真っすぐな北山杉を生産するために、労働力を惜しげもなく注いできました。ここで生産された細い丸太の材が茶室などの数寄屋建築に用いられ、茶の湯の文化にもつながっていきます。ひとつの株から数十本もの幹を育てる、台杉と呼ばれる独特な育林方法も、中川で編み出されました。京都の周縁地域では、「園芸農林業」と呼んでも過言ではないほどの生産方法をとってきた結果、個性的な農地や山林の風景が生まれています。



寺社が連なる東山



宇治茶を育てる向島の茶園



貴船の料理旅館が宮む川床



大原の紫液け用赤しそ栽培



手入れの行き届いた塚原の竹林



中川での台杉の手入れ



# 「過去」

## とのつながりから見る

わたしたちが目にしていく風景は、時代ごとの都市の変化が幾重にも折り重なることで、かたちづくられてきました。その重なりを丁寧に解きほぐし、明らかにしていくことから、人の営みと自然が織りなす文化的景観、土地固有のアイデンティティを見出していくことができます。「京都らしい」文化的景観の継承は、過去の中に営みの作法を見つけ、次の営みをつくり出していくことからはじまっていきます。

#多様と画一 #碁盤目状の街区 #江戸時代 #町家 #明治時代  
#洋風建築 #高度経済成長期 #商業ビルとマンション #岡崎公園  
#文教地区 #近代化 #洛中近郊の農地 #京都の副都心 #地域の価値  
#人と自然の関係 #地域を知る手がかり #京都らしさ #アイデンティティ #山紫水明

## 歴史の積み重ね

目の前に広がる風景は、「いま」だけのものではありません。有形・無形の人々の営みが関わり合い、時間の中で積み重なりながら成り立っています。

現在の中心市街地に広がる、まっすぐな通りからなる街区と、木造の町家、レトロな洋風建築、商業ビルやマンションが入り交じるまちなみ。これはどのように形成されたのでしょうか。

南北と東西に直交する碁盤目状の街区は、平安京をつくるときに施行された条坊制という都市計画により生まれました。中世には道路の一部が田畑や宅地となったり、街区の中に細い小道が通されたりしつつも、条坊制は京都の基盤として、千年以上にわたり、まちの骨格であり続けています。江戸時代になると、その通りに沿い、ファサード（建築物の正面部分のデザイン）に同じルールをもった町家が建てられるようになりました。明治時代には京都にも近代化の波が押し寄せ、西洋の様式を取り入れた近代建築が点々と現れます。そして昭和30年代、高度経済成長期を迎えると町家の建て替えが進み、問屋などの商いはそのままに、鉄筋コンクリート造のビルに変わっていききました。バブル以降は外部資本に

よるマンション開発が目立つようになり、京都の人々にとって受け入れがたい変化も起きていきます。そこで、現在では自治組織と京都市が協働しながら、ゆるやかな規制・誘導が図られるようになりました。

京都というと、しばしば歴史的な側面から語られますが、実際には、積極的に新しい要素を取り入れてきた都市でもあります。時代とともに発展することで、今日まで都市として生き続けてきたのです。この時代ごとの変化を見ていくと、多様と画一を繰り返してきたさまが読みとれます。古いものと新しいもの、多様なものと画一的なものが入り交じる現在の姿は、歴史を積み重ねてきた京都の個性と言えるでしょう。

わたしたちはいま、風景として可視化された歴史の層の上に立っています。人々はその土地固有の自然条件の中で豊かに暮らすために、生活の知恵や技術を進化させてきました。それぞれの時代における社会制度や経済の変化に対応しつつ、多くの選択を繰り返してきたのです。その選択の結果である現在の風景は、幾重にもなる人々の営みの歴史そのものと言えるでしょう。



通りに残る大規模な町家建築



近代建築のある西本願寺門前町



呉服問屋のビルが集まる室町通



デザイン基準に沿った平成以降のマンション

## 営みの変化と持続

いま、目の前に広がる風景にたどり着くまで、地域は様々に変化してきました。これまでの過去を塗り替えるような大きな変化もあれば、過去を引き継ぎながらの小さな変化もあります。これらを丁寧に調べていくと、見た目は変わったものの仕組みは変わらないものや、営みの中で維持されている何かと出会うことがあります。

たとえば、京都市左京区の岡崎公園は、美術館や図書館、ホール、動物園などの文化施設が集まる文教地区ですが、こうした性格はいまにはじまったものではありません。明治時代に博覧会の会場となったこと、また、平安神宮がつくられたことにより、人々が集う場所という性格が根付いていきました。岡崎公園は京都の近代化を支えた土地でもあります。

博覧会場となる前、近世の岡崎は洛中近郊の農村でした。聖護院だいこんや聖護院かぶといった京野菜の産地として、京都の食文化を支えていたのです。さらにそれより前、古代～中世の岡崎には、巨大な寺院や貴族の別荘が立ち並び、大きくなっていく都を支える

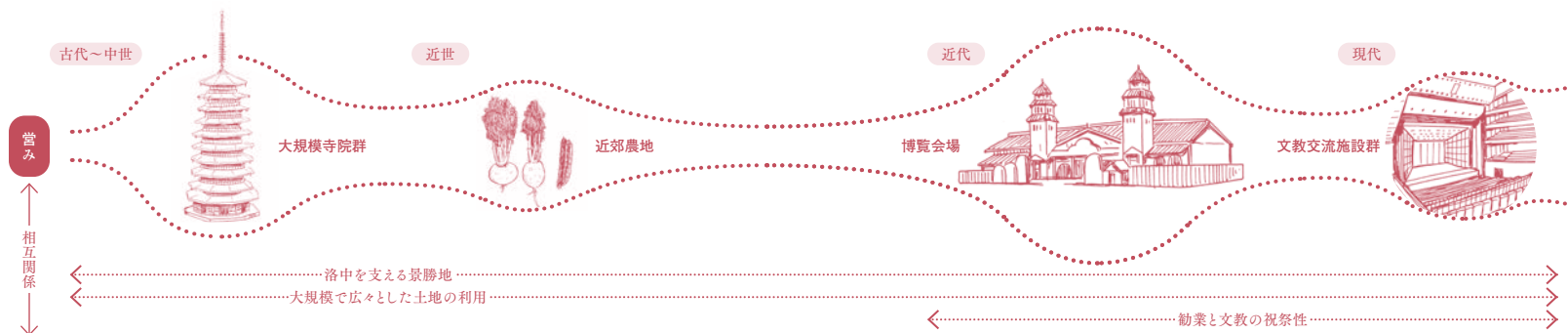
副都心の役割を果たしていました。

古代～中世の大規模寺院群、近世の近郊農地、近代の博覧会場から現在の文教地区へ。岡崎公園は時代によって大きく姿を変えてきたように思えます。しかし、その性質を見てみると、景勝の地であること、洛中を支えるヒンターランドの役割を果たしてきたこと、大規模で広々とした土地の使い方をしていることが、どの時代にも共通しているのです。

地域の価値を探るときにわかりやすいのは、そこがもっとも繁栄した時代の特性に注目することです。もちろん、繁栄しているときの方がそれぞれの個性が際立ったかたちで見えることも多いでしょう。しかし、これは地域のハイライトをとらえているにすぎないとも言えます。地域らしきを見出そうというときには、歴史の変遷をじっくりと眺め、長い営みの中で変わることのない、人と自然との関係や暮らし方の知恵を見出すことこそ重要です。

### 京都・岡崎公園エリアの場合

出典：文化的景観学検討会「地域のみかた」(2016年)イラスト 山内廣貴



## 都のイメージ

これまで、様々な姿を変えてきた京都ですが、平安京の時代からずっと変わらなかったこともあります。それは、日本の首都であるということにほかなりません。首都が東京に遷った後も、都に由来する文化や建物などはまちに残り、受け継がれてきました。

いま、京都には「京都らしさ」を求めて多くの旅行者が訪れていますが、実は、平安時代にも都を見物する観光客の姿がありました。また、京都内外の様々な人々が抱くイメージによって京都は詠われ、絵や読み物に描かれてきた歴史もあります。太平の世と呼ばれる江戸時代になると、寺社などの名所に多くの人々が訪れるようになりました。『京童』や『京城勝覧』、『都名所図会』などの京都案内記が相次いで刊行され、東山、嵯峨、鞍馬といった現在と変わらぬ京の名所に、各地から人が押し寄せるようになったのです。「京都らしさ」とらえられるものは時代によって少しずつ異なりますが、千年の間、首都であり続けてきたことにより、都というイメージは、京都の人のみならず、広く日本人のDNAに埋め込まれてきたのかもしれない。

しかし、明治時代になると首都が東京に遷され、京都も他の都市との差別化を図らなければならなくなりました。首都という絶対的な価値を失った京都は、一旦は失った都市の機能を復興させるため懸命に近代化を図り、同時に、残されたものにより磨きをかけるようになっていきます。当時、京都に残されたものとは、ひとつは千年以上にわたり首都として培った歴史・文化であり、もうひとつは山紫水明の美しさでした。近代以降の京都は、それらを体現する博覧会の開催、平安神宮の創建などを通じて、「首都であったこと」を都市のアイデンティティとする、新たな道を歩みはじめます。こうして、いまに

続く古都・京都が誕生したのです。

都市の風景は、地域の生活や生業といった実態のある営みだけでなく、人々が生み出したイメージによって創り出されることもあります。特に近年の京都では、世界各国からの来訪者の増加により、京都らしさを強調するような建物の新改築なども散見されるようになりました。これからの京都の景観を考え、「京都らしさ」を育てていこうとするとき、わたしたちは過去の意匠を引用するだけでなく、生活・文化・自然・歴史の中に京都らしい営みの作法を見つけながら、次の営みの文化をつくっていくことが大切なのではないでしょうか。



「都林景名勝園会」に描かれた雲林院の花見(国際日本文化研究センター所蔵)



石畳舗装と無電柱化による歴史的町並みの整備



明治28年(1895)の第4回内国博覧會会場園(京都市歴史資料館所蔵)



昭和10年(1935)の大水害を受けて整備された鴨川と高野川



大正期の舞妓イメージの広がり(京都市立京都学・歴史館所蔵)



屋外広告物の規制と誘導が図られた四条通

# 「人」

## とのつながりから見る

地域の風景をつくるのは、そこに暮らす人たちです。建物も人が住まなくなると朽ちていきますし、水田も畑も耕作をしなくなると荒れていきます。どのように暮らし、何を大事にするのか、人々の選択が風景に現れるのです。そして、同じ場所で何世代も暮らし続ける中で、地域の使い方を充実させ、暮らしの作法を生み、社会組織をつくるなどします。そうして、より暮らしやすい、地域らしい風景が生まれるのです。

#番組 #京都のまちの開発は「いいところ」で収まっている #景観を守るためのしくみ #ちょうどいい具合の変化 #物語の続き

## 自治の風土がつくるもの

京都の中心部では、応仁の乱を契機に、住人が自分たちの生活を守るために自治組織をつくるようになりました。戦国時代になると、道路を挟んで向かい合う住民によって「町」というコミュニティが生まれ、さらに隣り合う「町」が集まって「町組」を結成し、さらにその町組のいくつかが結合して、上京・下京などの「惣町」を形成しました。

下京惣町では、応仁の乱により中断していた祇園祭を再興し、町の人々が都の祭礼を支えるようになりました。住民たちは町の秩序を守り、維持していくための様々な問題を議論し、意識的または無意識的に独自の暮らしのルールを生み出していきます。また、織物業や扇づくりといった同じ職業の人々が集住する地域も形成されていきました。同業者集団ができ、京都の産業を支えていたのです。

江戸時代になり平和な生活が根付くと、京都の人々は日常生活をできるだけ円満に行うための様々な約束事を定めます。そのルールは、土地の売買や賃貸から、住民の職業、町家のファサードにまでお

よびました。町や町組といった地域コミュニティが、人々の生活の基盤となるとともに、地域の景観をかたちづけてきたのです。

このような近世までにつくられた自治組織が、近代の番組・学区などを経て、現在の行政区分や住民主体のまちづくりにつながっています。先斗町まちづくり協議会、姉小路界隈まちづくり協議会、明倫自治連合会などの成り立ちや活動には、戦国期にはじまった地域コミュニティの自治の伝統が感じられます。それは中心部だけでなく、周縁の地域も同様です。多くの水田は、水利の組織がなければ維持できません。神社や祭りの風景も、氏子の支えなくては成り立ちません。地域コミュニティの自律的な地域づくりが、それぞれの景観の根底にあるといえるでしょう。



まちづくりワークショップの様子



久多での松上げの準備

## 景観を守るしくみ

地域の風景をつくっているのは、住んでいる人たちだけではありません。実際には、地域外の企業や個人の活動も関係し、それぞれの時代の政治のあり方にも規定されます。

京都の風景は、首都としての歴史の中で様々な関係者によってつくられ、そして幾度となく変わってきました。その京都に起きた最大の変化が、東京遷都によって首都の地位を失うということでした。衰退する京都に活力を取り戻すため、市民一丸となって様々な近代化事業に着手します。人材育成、産業復興、インフラ整備などによって、京都は活力を取り戻していきました。

その一方で、明治末期から大正期になると、急速な近代化による課題も顕在化してきました。道路の拡幅や軌道の敷設、東山へのロープウェイ設置計画などにより、京都が培ってきた趣を失うのではないかという危惧から、景観論争が起きたのです。そうした事態に対処するため、昭和5年(1930)、周囲の山々や鴨川などが風致地区に指定されることになりました。昭和初期という早い段階から、中心地域と一体となって京都をかたちづけてきた周縁の地域が意味ある場所とされて、景観保全が図られてきたのです。

第二次世界大戦後の高度成長期を迎えると、建物の高さが主な景観問題となります。歴史的市街地に合わない都市計画制度と飛躍的な技術革新によって、建物の高層化が進みました。その後、町家が壊される中で、大手ハウスメーカーによる新工法の住宅の建築も増えるようになります。周縁の地域には宅地開発の波が押し寄せ、景勝地の姿が変容していこうとしていました。そこで、京都市では昭和40年代から、全国に先駆けて様々な制度をつくり、景観の保全に

### 景観を守る主な制度の沿革

昭和5年(1930)

風致地区の指定

→昭和5年(1930)から昭和7年(1932)にかけて、名勝・景勝地のほとんどを風致地区に指定し、開発に対して歴史的風致との調和を強く図る。

昭和41年(1966)

古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法

→三山とそのふもとの地域など、自然環境と歴史的建造物などが一体となって歴史的風土をつくってきた地区を指定し、開発を規制して環境を保存。京都市では翌年に最初の地区決定。

昭和47年(1972)

京都市市街地景観条例

→美観地区の導入と町並み保全制度の創設。昭和50年(1975)の文化財保護法の改正による伝統的建造物群保存地区制度の創設にもつながる。現在の京都市市街地景観整備条例。

昭和48年(1973)

市街地の大半で建物の高さ規制(高度地区)

→住環境の保全と伝統的な市街地の景観を保全するため、将来の土地利用を考慮して指定。

平成17年(2005)

京都市景観計画

→50年度、100年後も京都が京都であり続けるため、「保全・再生・創造」を基本とした京都の景観づくりを推進。

力を入れてきたのです。都市として持続的であるための市街地更新を模索しつつ、歴史的景観も含めて京都を整えるという思想のもと取り組んできました。

三山の眺望、鴨川や桂川の風景、緑豊かな山麓の寺社仏閣、歴史的な町並み、町家が点在する低層の中心市街地、にぎやかな花街や繁華街の姿、こうした京都の中の様々な風景は、京都の人々の自治の風土と行政の地道な取り組みとが一体となった結果です。京都では文化として景観を育んできたと言えるのではないのでしょうか。



## 折り合いのマネジメント

京都の原点は、条坊制によってつくられた計画都市・平安京です。平安京に住む人々は、やがて自主的な住みこなしによって、暮らしに便利で快適なように空間を少しずつ変えていきました。

中世になると、平安京の正方形の街区の中に辻子と呼ばれる新たな道が通されたり、道路の一部を農地や宅地に変えたりする動きが、町衆の中から出てきました。また、平安京では、家の出入り口は東西のどちらかのみに限られていましたが、徐々に南北の方向にも出入り口を持った家々が建つようになります。そして、街区の4つの面それぞれに町家が並び、道をはさんで向かい合う家々がひとつの「町」をつくるようになりました。京中では、中世以降、この両側町が自治の基本単位となっています。

近世には、秀吉が京の都を城下町として再生させるために、洛中を御土居で囲み、正方形の街区に南北の小路を挿入する、いわゆる天正地割を行いました。秀吉は、土地利用効率を高め経済を活性化しようと小路を入れましたが、両側町の基本は、いまに至るまで継承されています。町が、地域の変化を調整する役割を担ってきたと言えるでしょう。京都の町の開発について造園家の吉村元男は、「開発のスケールが『いいところ』で納まっている」と述べ、その良さを、「開発スケールが時間的、空間的にも、市民にうまく消化されたときに成立するのではないか」と考察しています。

周縁の地域では、高度成長期にも開発圧力が及ばず、穏やかに変化してきた場所もあります。開発が抑えられたことで若者の流出が促進されたところもありますが、暮らしの秩序が引き継がれて、独特の〈地域らしさ〉をいままで維持することができた部分もあります。

地域は様々な時代のインパクトを受けています。その中で、スケールも、スピードも、コンテンツも、地域にとってちょうどいい具合の変化は、時代を超えて受け継がれていく力を持っています。そうした折り合いのつく変化を続けていくためには、地域がどのようにしていまの姿になってきたのかというプロセスを知り、これから起こりそうな変化を予感し、そのインパクトに対応する選択肢を増やしていくことが必要でしょう。人口減少にどう備えるかということも、そのひとつと言えます。選択肢の多様性が、地域のレジリエンスを高めてくれるのです。

過去を振り返り、現在を知り、未来を考え、整えていく。地域が生き続けていくということは、変化をうまく織り込みながら、物語の続きを描き続けていくことでもあります。



両側町の風景

## 京都の文化的景観リスト

京都には文化的景観としてとらえられる様々な地域のまとまりがあります。

ここでは71の地域を取り上げ、それぞれの地域の特徴を表す内容をキーワードとして示しました。

しかし、自然基盤と人々の営みの相互作用が作りだした地域は、もっとたくさんあるはずです。

この本や、ここに示すリストを参考に、みなさんの住むまちの〈地域らしさ〉を探してみませんか。

地域分類	エリア	キーワード
1	桂川上流域	広河原・花脊
2		農山村, 林業, 松上げ, 虫送り, 粽用の笹生産
3		農山村, 林業, 伏台区杉群, 板倉, 公民館建築
4		農山村, 林業, 洗い場(イトヤ), 鮎漁, 山國神社, 山國隊軍楽
5		農山村, 林業, 木材市場, 八幡宮社, 周山街道, 公民館建築
6	花折断層地帯	久多
7		林業, 志古淵神社, 松上げ, 花笠踊り, 友禪菊
8		小盆地, 高野川, 天台宗寺院(勝林院・米迎院・三千院等), 江文神社, 農山村, 棚田, 赤紫蘇, しば漬, 茅葺民家(トタン被せ)
9		高野川, かま風呂, 保養地, 八瀬教免地踊り
10		霊場, 延暦寺, 行者道, 登山道, 近代保養地
11	北山南縁	静原
12		農山村, 静原社, 烏帽子着
13		鞍馬山, 鞍馬寺, 門前町, 鞍馬街道, 街村, 元炭問屋の町家群, 鞍馬石, 木の芽煮, 鞍馬火祭
14		貴船山, 貴船神社, 貴船川, 料亭, 川床
15		雲ヶ畑
16		雲ヶ畑川(賀茂川源流), 山村, 林業, 茅葺民家(トタン被せ), 石垣, 松上げ
17		清滝川, 山村, モザイク状の山林, 北山林業, 北山杉(台杉仕立て・一本仕立て), 磨丸太倉庫群
18		周山街道, 農山村, 林業, 山林地主の民家, 岩戸落葉神社
19		寺社(高山寺・西明寺・神護寺等), 林業, 近代保養地, 川床
20		三尾(梅尾・榎尾・高雄)



山裾に民家が並ぶ黒田



扇状地上に位置する静原の集落

16	愛宕山麓	愛宕山	霊場, 愛宕神社, 火伏信仰, 千日通夜祭(千日詣)
17		水尾	農山村, 清和天皇社, 柚子, 石垣
18		幡原	農山村, 丹波から愛宕山への参道, 一の鳥居, 旅籠建築, 砥石, 棚田(鑑田), 桃原池
19		越畑	農山村, 棚田, 茅葺民家(トタン被せ)
20		鳥居本	愛宕山への表参道, 門前町, 農村, 五山送り火「鳥居形松明」, 嵯峨鳥居本伝統的建造物群保存地区
21	東山丘陵	祇園界限	八坂神社, 建仁寺, 花街(祇園甲部・宮川町・祇園), 南座, 祇園新橋伝統的建造物群保存地区
22		古門前通・新門前通	古美術商の同業者町
23		清水界限	寺社(知恩院・高台寺・清水寺等), 霊廟(大谷祖廟・大谷本廟), 歴史的参道, 茶屋, 土産物店, 産寧坂伝統的建造物群保存地区
24		五条坂	清水寺, 清水焼, 登り窯, 陶磁器商
25		泉涌寺界限	泉涌寺, 天皇陵, 京焼, 伏見人形, 商店街
26		深草	稲荷山, 伏見稲荷大社, 門前町, 街道町, 琵琶湖疏水(鴨川運河)
27	桃山丘陵	伏見	宇治川・高瀬川・琵琶湖疏水(鴨川運河), 近世城下町, 京阪奈の中継点, 酒造業, 伏見港, 御香宮
28		桃山	桃山, 天皇陵, 伏見城跡
29	紙屋川流域	鷹峯	鷹峯台地, 紙屋川, 京見峠, 山国街道, 街村, 船岡山, 御土居
30		衣笠	鹿苑寺(金閣寺), 五山送り火「左大文字」, 近代住宅地, きぬかけの路

31		西陣	西陣織, 同業者町, 織屋建て, 商店街, 仕出し, 今宮神社
32		北野	北野天満宮, 花街(上七軒), 天神市, ずいき祭, 御土居
33	御室川流域	御室・花園	段丘, 双ヶ岡, 寺社(仁和寺・龍安寺・妙心寺等), 土地区画整理事業
34		山越・鳴滝	低位段丘, 植木生産地, 造園業
35		原谷	谷中分水界, 戦後開拓地, 桜林
36	桂川谷口部	北嵯峨	扇状地, 大沢池・広沢池, 大覚寺, 嵯峨七ツ塚古墳群, 田園, 嵯峨祭
37		嵯峨・嵐山	桂川, 嵐山, 寺社(野々宮社・天龍寺・清涼寺等), 竹林, 保津川下り, 製材業, 西高瀬川
38	北摂山地東麓	松尾	桂川, 松尾大社, 西芳寺(苔寺), 洛西用水, 神幸祭・還幸祭
39		樫原	山陰街道, 物集女街道, 宿場町, 本陣建築
40		大枝	園芸農林業, 京たけのこ, 富有柿, 桂坂ニュータウン
41		大原野	複合扇状地, 大原野神社, 園芸農林業, 京たけのこ, 洛西ニュータウン
42	鴨川扇状地上流部	上賀茂	賀茂別雷神社(上賀茂神社), 社家町, 明神川, すぐき菜, 賀茂なす, 葵祭, 上賀茂伝統的建造物群保存地区
43		深泥池	農村, 棕加工, 水生植物群落
44		北山通	高級住宅地, ケヤキ並木, 土地区画整理事業
45		松ヶ崎	泉川, 洗い場, 菜の花漬, 涌泉寺, 題目踊り, 五山送り火「妙・法」



越畑の断層による緩斜面



水陸交通の要衝として発展した伏見

織物関係の工場が連なる西陣



愛宕・野宮兩神社の祭礼「嵯峨祭」

46	下鴨	賀茂御祖神社(下鴨神社), 糺の森, 泉川, 景勝住宅地, 葵祭
47	出町柳	賀茂川・高野川, 枳形商店街, 鴨川デルタ
48	鴨川扇状地中央部	東陣界限 中心市街地(上京), 御霊神社(上御霊神社), 相国寺, 公家町跡, 同志社大学, 老舗, 辻子, 小川通, 茶道家元, 茶道具店
49	祇園祭山鉦町	中心市街地(下京), 和装関係問屋, 銀行, 町衆, 祇園祭, 六角堂
50	三条~四条河原町界限	寺町, 各種専門小売店舗, 百貨店, 商店街(寺町通・新京極通・河原町通・三条通・錦小路通・四条通等), 近代建築群, 八坂神社御旅所
51	木屋町通界限	高瀬川, 藩邸跡, 寺社(瑞泉寺・廣誠院等), 花街(先斗町), 歓楽街, 納涼床, みそそぎ川
52	二条~壬生界限	湧水, 堀川, 神泉苑, 壬生寺, 二条城, 染色工場, 木材問屋, 西高瀬川
53	鴨川扇状地末端部	東西本願寺界限 本願寺(西本願寺), 真宗大谷派(東本願寺), 興正寺, 門前町, 仏具製造販売業, 宿泊施設, 龍谷大学
54	京都駅前	ターミナル駅, 宿泊施設, 飲食店街, 京都タワー, 柳原銀行記念資料館
55	烏原	公許遊郭跡, 大門, 揚屋建築, 置屋建築
56	白川扇状地	北白川 山中越, 白川石, 石材業, 小倉町住宅地
57	吉田	吉田山, 吉田神社, 銅板葺住宅群, 京都大学, 学生街, 山中越
58	哲学の道界限	寺社(慈照寺・本山獅子谷法然院等), 哲学の道, 桜並木, 景勝住宅街, 五山送り火「大文字」

59	南禅寺界限	禪宗寺院, 琵琶湖疏水分線, 近代別邸群, 疏水園池, 琵琶湖・淀川水系の魚類, アカマツ
60	岡崎公園	大規模街区, 琵琶湖疏水(鴨東運河), 平安神宮, 文化施設群(美術館・動物園・ホール等), 時代祭
61	山科盆地	安朱 毘沙門堂, 琵琶湖疏水(山科疏水), 近代住宅地
62	追分	旧東海道と奈良街道の分岐点, 街村
63	清水焼団地	窯業の同業者町(窯元・問屋・材料屋等)
64	勸修寺	勸修寺, ブドウ畑, 観光農園
65	鴨川自然堤防帯	上鳥羽 教王護国寺(東寺), 羅城門跡, 鳥羽街道, 街村, 弘法市, らくなん新都
66	下鳥羽	鳥羽離宮跡, 鳥羽街道, 街村, らくなん新都
67	桂川自然堤防帯	梅津 自然堤防集落, 梅宮大社, 染色工場
68	久世	自然堤防集落, 洛西用水, 水田, 西国街道, 光福寺(蔵王堂), 久世六齋念仏
69	久我・羽束師	自然堤防集落, 洛西用水, 水田, 久我神社, 羽束師坐高御産日神社,
70	三川合流域	向島 宇治川, 太閤堤, 大和街道, 堤道集落, 生垣, 巨椋池干拓地
71	淀	桂川・宇治川・木津川, 城下町, 與杼神社, 競馬場, ベッドタウン



農業用水「泉川」により潤う松ヶ崎の農地



千本通の材木問屋街

近代の郊外住宅が広がる安朱



桂川右岸の自然堤防集落

## 京都らしさの理解につながる10の資料

### 『京都の地震環境』

植村善博／ナカニシヤ出版／1999 ※版元品切れ

地震発生時の危険度をふまえ、自然地理学の立場から京都盆地の地質・地形の条件を丹念に探った1冊。京都盆地の非常に細やかな地形や地質のありようを知ることができます。付属の「京都盆地の地震災害危険度マップ」は京都の自然基盤を理解する上でも必見。



### 『京都 千年の水脈』

NHK「アジア古都物語」プロジェクト編／日本放送出版協会／2002  
※版元品切れ

京都盆地の底にある「水盆」とも表現できる巨大な水がめの存在にせまったNHKスペシャル「アジア古都物語」の書籍版。西陣織などの生業や祭礼行事に用いられる京都の水と地下水脈との関係を改めて考えることができます。



### 『京都歴史アトラス』

足利健亮編／中央公論社／1994 ※版元品切れ

先史時代から現代までの京都の変化を、豊富な図版から解説する歴史地図帳。地理学や歴史学などの研究者22名がそれぞれの専門性を活かして京都の歴史を多様な角度から切りとります。掲載図版はカラフルで、眺めているだけでも京都の歴史ダイナミズムを堪能できます。



### 『図集 日本都市史』

高橋康夫・宮本雅明・吉田伸之・伊藤毅(共編)／東京大学出版会／1993 ※版元品切れ

古代から近代にいたるまでの日本各地の都市の形成史を集めた1冊。20世紀の都市史研究の成果が、美しい図版とともに示されています。すべてが京都に関する内容ではありませんが、他の都市とあわせて読むことで京都らしさがより鮮明となります。



### 『京都』

林屋辰三郎／岩波書店／1962

京都を不変の古都ではなく、時代の動きの中で新陳代謝を続けてきた都市としてとらえる、京都学の古典。発刊後60年間の研究の進展により旧説となっている点もありますが、京都の歩みを理解するための記念碑的な業績であることに変わりはありません。



### 『京・まちづくり史』

高橋康夫・中川理編／昭和堂／2003 ※版元品切れ

土地・地域・コミュニティに即した住民の自主的な活動を「まちづくり」として、京都を舞台にその変遷をとらえなおそうという労作。多様な切り口から、平安時代から現代へと移り変わってきたまちづくりのあり方を浮かびあがらせ、今後のまちづくりを見通します。



### 『プラタモリ』①～⑧

NHK「プラタモリ」制作班監修／KADOKAWA／2016-2019

まちの成り立ちを土地や建物に残る痕跡から、自然・歴史・文化など様々なアプローチで掘り下げる人気番組「プラタモリ」の書籍版。7巻では嵐山と伏見、13巻では清水寺一带と祇園が取り上げられています。



### 『京都の平熱 哲学者の都市案内』

鷲田清一／講談社／2013

京都生まれ京都育ちの哲学者がつづる等身大の京都紹介。有名寺社などの観光地の影に隠れた京都人の素顔を、筆者が見聞きし食した様々なエピソードやグルメを交えながら描きます。京の生活文化とその深層に居座る京都人の心象をのぞき見することができる一冊。



### 『近代京都オーバーレイマップ』[WEB]

立命館大学アート・リサーチセンター

明治中期から昭和中期までに作成された8枚の京都市街地の地図を、Googleマップにオーバーレイ(重ね合わせ)させながら閲覧できるWebサイト。数種の地図を比較することで、近現代の京都がどういった変遷を遂げてきたのかを実感的にとらえられます。



### 『今昔マップ on the web』[WEB]

埼玉大学教育学部 谷謙二

日本各地の都市圏を描いた明治期以降の旧版地形図を閲覧・比較することができるWebサイト。京都に関しては、近代京都オーバーレイマップで枠外となっている京都盆地の周縁部も閲覧できます。



## 参考文献リスト

### 参考文献

青山吉隆編「職任共存の都心再生—創造的規制・誘導を目指す京都の試み」学芸出版社, 2002  
秋山国三・仲村研「京都「町」の研究」法政大学出版会, 1975  
上杉和央「歴史は景観から読み解ける: はじめての歴史地理学」ペレ出版, 2020  
上杉和央・加藤政洋「地図で楽しむ京都の近代」風媒社, 2017  
植村善博・香川貴志編「京都地図絵巻」古今書院, 2007  
小椋純一「森と草原の歴史—日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか」古今書院, 2012  
貝塚夷平他編「日本の自然—地域編6 近畿」岩波書店, 1995  
梶川敏夫「よみがえる古代京都の風景—復元イラストから見る古代の京都」2016  
加藤政洋「モダン京都—(遊楽)の空間文化誌」ナカニシヤ出版, 2017  
鎌田道隆「近世京都の都市と民衆」思文閣出版, 2000  
金田章裕「文化的景観 生活となりわいの物語」日本経済新聞出版社, 2012  
金田章裕「景観からよむ日本の歴史」岩波書店, 2020  
金田章裕編「平安京 京都—都市園と都市構造」京都大学学術出版会, 2007  
京都市編「京都」淡交新社, 1961  
京都市編「京都の歴史」1-10, 学芸書林, 1968-1976  
京都市編「史料京都の歴史」1-16, 平凡社, 1979-1994  
京都文化博物館企画・編集「舞妓モダン—Maiko beauty—画家たちが描いた京都の美しい舞妓たち」青幻舎, 2020  
京都市歴史資料館「フィールド・ミュージアム京都」<http://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishu/fm/>  
京都伝統文化の森推進協議会編「京都の森と文化」ナカニシヤ出版, 2020  
京都府教育庁文化財保護課編「京の町並」京都府文化財保護基金, 1977  
源城政好・下坂守編「京都の地名由来辞典」東京堂出版, 2005  
小林丈広・高木博志・三枝暁子「京都の歴史を歩く」岩波書店, 2016  
下坂守「中世寺院社会と民衆—衆徒と馬借・神人・河原者」思文閣出版, 2014  
白幡洋三郎ほか編「京都百年パノラマ館」淡交社, 1992  
白幡洋三郎監修「京都市今昔写真集」樹林舎, 2008  
新創社「京都時代MAP」4巻, 光村推古書院, 2003-2008  
杉森哲也「近世京都の都市と社会」東京大学出版会, 2008  
鈴木康久「水が語る京の暮らし」白川書院, 2010  
高嶋四郎編「京の伝統野菜と旬野菜—歳時記」トホ出版, 2003  
高橋康夫「京都中世都市史研究」思文閣出版, 1983  
高橋康夫「海の「京都」—日本琉球都市史研究」京都大学学術出版会, 2015  
高橋康夫「京都と首里—古都の文化遺産研究」文理閣, 2020  
田中和博編「古都の森を守り活かす—モデルフォレスト京都」京都大学学術出版会, 2008  
玉置豊次郎「日本都市成立史—都市建設資料集成」理工学社, 1974  
地学団体研究会京都支部編「京都五億年の旅」法律文化社, 1976  
地図資料編纂会編「明治前期 関西地誌図集成—1884(明治17)年~1890(明治23)年」柏書房, 1989  
地図資料編纂会編「正式二万分一地形図集成 関西」柏書房, 2001  
網本逸雄「京都盆地の災害地名」勉誠出版, 2013  
中川理「京都と近代—せめぎ合う都市空間の歴史」鹿島出版会, 2015  
中村一・尼崎博正「風景をつくる—現代の造園と伝統的日本庭園」昭和堂, 2001  
西川幸治・高橋徹・穂積和夫「京都千二百年」上・下, 草思社, 2014

林屋辰三郎「町衆—京都における「市民」形成史」中央公論社, 1964  
風景デザイン研究会「京の原風景—都市美」学芸出版社, 1980  
文化庁文化財部記念物課監修「日本の文化的景観—農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書」同成社, 2005  
文化庁記念物課「都市の文化と景観」同成社, 2010  
文化的景観学検討会「地域のみかた—文化的景観学の手ずみ」奈良文化財研究所, 2016  
平凡社編「京都市の地名(日本歴史地名大系27)」平凡社, 1979  
平凡社編「京都府の地名(日本歴史地名大系26)」平凡社, 1981  
法政大学エコ地域デザイン研究センター編「2018年度報告書」2019  
丸山俊明「京(みやこ)のまちなみ史—平安京への道 京都のあゆみ」昭和堂, 2018  
宗田好史「町家再生の論理—創造的まちづくりへの方途」学芸出版社, 2009  
山田邦和「京都市史の研究」吉川弘文館, 2009  
横山卓雄「京都の自然史—京都・奈良盆地の移りかわり」京都自然史研究所, 2004

### 調査に活かせるオンライン地図・アプリ

国土地理院「地理院地図」<https://maps.gsi.go.jp/>  
産総研地質調査総合センター「地質図Navi」<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>  
スマートフォン・タブレット型端末アプリ「スーパー地形」

### 京都市内の文化的景観の報告書やパンフレット

「京都岡崎の文化的景観調査報告書」2013  
「重要文化的景観「京都岡崎の文化的景観」パンフレット」2015  
「岡崎公園—洛東にできた都市の広場(時間を旅する絵本「京都岡崎の文化的景観」1)」2017  
「白川と疏水—都市をめぐる水の冒険(時間を旅する絵本「京都岡崎の文化的景観」2)」2018  
「京都中川の北山林業景観調査報告書」2019  
「京都の文化的景観調査報告書」2020  
※いずれも、国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室編、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課刊行。一部は京都市HP「京都の文化遺産」(<https://kyoto-bunkaisan.com/>)で公開しています。

## おわりに -この本ができるまで

京都市では平成27年(2015)度から令和元年(2019)度にかけて、国庫補助事業として、京都市域全域を対象とした文化的景観の調査を行いました。本書はこの調査の報告書である『「京都の文化的景観」調査報告書』の内容をもとに、より理解しやすいかたちに編集したものです。京都というと、歴史的な観点から〈地域らしさ〉が語られがちだったり、農山村よりも中心地域に注目が集まりがちだったりします。しかし、本書にまとめた、①自然とのつながり、②営みとのつながり、③過去とのつながり、④人とのつながり、という4つの観点から京都を見てみると、京都の中に特徴のない地域はないことに気づきます。暮らす人にとっては日常の何気ない風景かもしれませんが、それを大事なものと理解していくことができるのではないかと考えています。

さて、文化財の最も大事な使命は、価値を守ることです。絵画や建造物といった有形文化財では、そのものの価値が最も輝いて存在していた時代の姿にとどめたり、戻したりして、時間による変化を止めることが保護といえます。しかし、文化的景観は生きている地域を対象としているので、変化を完全に止めることはできません。生活や生業が続いているからこそ存在する価値の継承には、時代に応じた変化が不可欠です。そのためには、〈地域らしさ〉を読みとり、それを道しるべとして、一定の振れ幅のもとに変化していくような取り組みが求められています。地域らしさの持続、それは京都で長く続けられてきた地域づくりのものではないでしょうか。文化的景観の考え方が地域づくりの手がかりとなり、地域の未来を語るきっかけになれば幸いです。

## 京都の文化的景観 調査報告書のご紹介



### DATA

『「京都の文化的景観」調査報告書』

編集：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室

発行：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室  
文化財保護課

発行日：令和2年(2020)3月31日

<https://kyoto-bunkaisan.com/report/tyousa05.html>

報告書では「京都の文化的景観」の特性を以下の5点にまとめました。

- 1) 京都盆地とその周縁の細かな自然条件に呼応した首都の暮らしがあり、その暮らしを特徴づける様々な景観のまとまりがあること
- 2) 中心地域とヒンターランドの関わりが長く持続し、景観として表出していること
- 3) 変化という観点から京都を見てみると、歴史的には多様と画一を繰り返しながら景観が育まれてきたこと
- 4) 「町」という地域コミュニティや町衆が景観を育ててきたこと
- 5) 首都に由来する「京都」というイメージが作り出す景観があること

# 地域のみかた

—京都の身近な風景からひもとく地域らしさ—

編著：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所文化遺産部 景観研究室

発行日：令和3年(2021)3月31日

発行：京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課

編集：MUESUM

デザイン：UMA / design farm

漫画：ホリグチイツ

京都市印刷物：第023260号

※本事業は宿泊税を活用しています。





